

“Mrs.Shadow hunter”

written by Keisuke Fudematsuri

奥様は

シヤドウハンター



筆祭競介

表紙イラスト：恋河ミノル

試し読み版

二次元ぶち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『奥様はシャドウハンター』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



奥様は
シヤドウハンター

筆祭競介
表紙 / 恋河ミノル

登場人物紹介

Characters

さゆり
紗由里

政府が非公式に組織したシャドウ感染者捕獲組織に所属するシャドウハンター。しかし、普段は夫に従う貞淑な妻。幸せな夫婦生活を夢見て、引退を決意する。

シャドウ

人間の負の部分に入り込む妖魔。完全に意識を乗っ取られた人間はモンスター化してしまう。

こうじ
浩次

紗由里の最愛の夫。どこにでもいる中年のサラリーマン。紗由里の仕事については、よくわかっていない。

金曜日の夜。

土日の連休を前にして、たちばな橘浩次は自宅マンションのリビングで寛いでいた。ビールを飲みながらDVDレコーダーに録画しておいた映画を見ている。

「おっ。これ、美味しいな」

酒のツマミとして小皿に盛った、シラタキとシラスの醤油炒めに顔が綻ぶ。妻が自分のために作っておいてくれた一品だ。夕食用に用意してくれたビーフカレーの味も、専門店のひけをとらない味だった。結婚当初はそれほど上手くなかった料理の腕が、最近ではどこで外食しても妻の方が美味しく感じるレベルになっている。

「……紗由里のヤツ、最近また泊まり込みの仕事が増えてきたな」

妻は中堅の製薬会社で働いていた。開発部門のチーフだそうで、仕事が忙しく出張や泊まりはしょっちゅうだ。

浩次は大型プラズマテレビの横に飾ってある、二人のツーショット写真に視線を向けた。小太りな自分の隣で妻の紗由里が微笑んでいる。

意思の強そうな切れ長の瞳に、引き締まった頬とショートカットの黒髪の組合せがとて凛々しい。女子校時代にバレンタインデーで大量のチョコを貰っていたという逸話を納得させるマニッシュさだ。それでいてふるんと肉感的な唇が、歳相応の色つぼさグッと醸し出している。幼いころから剣道で鍛えたプロポーションは抜群に均整がとれていて、

立ち姿はスラッとしていた。それでいて胸だけは豊かに実り、セクシーなアクセントになっている。

彼女は現在二十九歳。六歳年上の浩次とは見合い結婚だった。

夫の鼻目かもしれないが、テレビなどで見るどの女優より美人だと思っている。少なくとも妻を抱いているときに他の女のことや脳裏に浮かんだことなど一度もなかった。彼女と出会ってからは、浮気どころか別の女をネタにオナニーすらしていない。妻が不在でどうしても我慢できないときは、彼女を思い浮かべて自分を慰めているほどだ。浩次はそれほど紗由里に惚れ抜いていた。

——俺には過ぎた奥さんだよな……。

缶ビールをあおり自身自身を振り返る。

小太りな容姿は中の下だし、取柄といえれば生真面目さぐらいだ。学生時代はコツコツと真面目に勉強して一流大学を卒業し、現在は大手家電メーカーの品質課長に収まっている。老後まで生活に苦労しないだけの収入はあるが、大金持ちというわけではない。紗由里ほどの女性なら、もっと条件のいい男を選べたはずである。なのに彼女は自分と結ばれてくれた。

『三十歳になったら会社を辞めて、アナタの奥さんに専念するね』

その誕生日まであと数日となっている。紗由里が家に入ってくれれば、こうして一人で

寂しく晩酌することもなくなる。夫婦の営みも、彼女の仕事のことがあり毎回コンドームをしていたが、それもあと少しの辛抱だ。念願の子供にも恵まれるだろう。彼女が白い産着に包まれた赤子を胸に抱き、子守唄を口ずさむ光景が脳裏に浮かび自然と頬が弛んだ。

「……紗由里、愛してるよ」

本人を目の前にしては、気恥ずかしくつとでも言えないセリフがポロリと口から漏れる。その直後だった。

ザッザザザッ。

テレビ画像が突然乱れはじめた。そして——ヴウンツ。

いきなり映像が切り替わる。今までCGをふんだんに使ったアクションシーンを映していた大画面に映ったのは——。

「……さ、紗由里？」

妻だった。どこかの工事現場だろうか。鉄骨やコンクリートの上に青いビニールシートが被せられている。目を覆う黒い仮面をつけているが、その瞳の力強さを自分が見間違うはずがない。黒いライダースーツを着ている均整のとれたプロポーションも同様だ。

そして彼女は一人ではなかった。妻と対峙するように四人の人影が立っている。全員、男だった。まだ若い。揃って軽薄そうな顔をしている。高校生の不良グループといった雰囲気だ。

「な、なんで紗由里がこんな奴らと……」

浩次はいつのまにか身を乗り出すようにして、プラスマテレビに見入っていた。

※

紗由里はシャドウに感染した男たちと対峙していた。

シャドウとは——人の心の隙に入り込み精神を蝕んでいく妖魔である。公式には全く発表されないが、世間を震撼させるような凶悪犯罪の大半はシャドウに取りつかれた人間の仕業であった。

——年々、感染者が若くなつていつてるわね。

シャドウハンターとして、最前線で戦い続けている紗由里はそのことを肌で実感していた。現在、向かいあつているシャドウたちもまだ高校生ぐらいに見える。

シャドウハンターとは、その名の通りシャドウ感染者を捕獲する者に与えられた呼称である。政府が非公式で組織するシャドウ感染者捕獲組織に所属し、高額なギャラと殺人のライセンスが与えられる。シャドウに決して感染しない強い精神力と、シャドウキャリアーと互角に渡りあうだけの戦闘能力があると判断された者だけが極秘でスカウトされる特殊職だ。学生時代に剣道で活躍していた紗由里は、大学生のときにスカウトされ、以降ずっとこの仕事を続けていた。ちなみにシャドウハンターのこととは両親や配偶者にも極秘である。親や夫には組織が用意したダミー会社に勤めていることにしている。

——その嘘も、もうつかなくてよくなるわ。

苛酷な仕事だった。軍に入り、戦場の最前線に常に派遣されているようなものである。それだけにシャドウハンターを十年務めれば、後は生活に困らないだけの年金を受け取れる。紗由里は二十歳になると同時にスカウトされたので、数日後に迫った三十歳の誕生日で引退するつもりだった。人並みの幸せを得るだけのことはしてきた自負がある。あとの人生は主婦として家に入り、子供を作り、愛する夫と幸せな家庭を築くつもりだった。

シャドウハンターとしてこれが最後の仕事になるだろう。

「んだ、お前。俺たちになんか用でもあんのか」

凄んできたのは肥満体型の少年だった。髪を派手な赤色に染め、鼻と唇にピアスをしている。その右隣に立っているのは体格のいいスキンヘッドの少年で、肩まで剥き出しにしている両腕には厚みのある筋肉と、炎のエンブレムのようなタトゥーが彫り込まれている。左隣で腕を組み下からしゃくり上げるようにこちらを睨んでいるのは、猿にそっくりな顔をした金髪のチビだ。三者三様に紗由里に対して『メンチを切っている』のだろう。三人とも、この若さですでに拭い難い悪相がべつたりと顔に染みついていていた。

そんな三人の後ろからこちらを窺っているのは茶髪の少年だ。その表情には前の三人のような敵意はなく、オドオドしながらこちらを不安そうに見詰めていた。一見して、不良の三人組とそのパシリといった雰囲気だ。

「しかし、いいおっぱいしてやがるなあ。人妻のクセにぜんぜん垂れてねえ」
「プリプリしてて、たまんねえぜ」

左右から揉み続けられた乳房は官能に火照り白い乳肌がピンク色に染まりはじめた。硬直した頂点はこれ以上ないほど敏感になっている。

その先端に二人の少年が同時にしゃぶりついてきた。

「……っ……っ……んはあっ！」

胸先を襲った容赦ない吸いつきに、噛み締め続けていた口をとうとう開いてしまう。

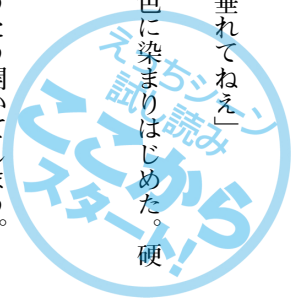
「ああっ、だ、だめえっ！ そ、そんなにああっ！ レロレロされたらあっ！」

股間から押し寄せる官能の波をやり過ぎすことに意識が集中していた。それだけに、敏感な乳首を包む生暖かい舌のぬめりと強烈な吸引までは耐えきれない。夫にしか許したことのない女体が、巧みな少年たちのテクニクに敏感に反応してしまふ。肉悦の底なし沼にずるずると引きずり込まれていってしまう。

「思った通りだぜ。今まで喘がないように我慢してたんだな」

「へへへっ。可愛いぜ奥さん。もう二度と旦那相手じゃ満足できねえ身体にしてやるよ」
デブが鼻息荒くちゅうちゅうと乳首を吸いたてると、スキンヘッドは長い舌で逆の乳首を包み込み、執拗に舐め回しはじめた。

——感じちゃうっ……おっぱいが凄く感じちゃうっ！



ぬめる舌が勃起した牝突起を擦るたび、胸の頂点からビリビリと官能の電撃が迸る。そして思う存分ニップルを味わったデブが、その分厚い唇を豊かに実った乳肉へと移動させた。

「はくううつ、ダメえつ、そんなに吸っちゃ！ キスマークだけは付けないでっ！」

「なんだお前、まだ旦那にバレる心配してやがるのか？ 俺たち相手にこんな感じまくってるクセによお。お前はもう俺たちのもんなんだよ、おらっ！」

少年たちは今まで以上に強く乳房に吸いつき、濃いキスマークを刻みつけていく。それは彼らの所有物となつてしまつた人妻に対する、肉奴隷としての烙印だった。

「ああつ。人妻のクセに……」

仲間たちに胸を好き放題食らわれているシャドウハンターを、正常位で繋がっている猿顔のチビが見下ろしている。他人に口腔奉仕をする紗由里を横で見ているときの暗い炎が灯つたような粘っこい視線だ。『人妻のクセに』という口癖を繰り返し、人妻の紗由里が他人に汚されるシチュエーションに異様に興奮している。

「くはああつ……つ、や、そんな、あくうつ……そんな所っ」

ねちっこかつた腰の動きがより細かくなっている。一定の動作で続けられていた挿送が、複雑な動きを見せはじめた。腰を小刻みに揺らすようにしながら、カリ部分で紗由里のヘソの裏辺りを擦ってくる。真上に反り返ろうとする牡肉の盛り上がりによって、女体を内

側から持ち上げるような腰使いだった。

——だ、だめええっ……そ、そこはっ……も、もう、我慢できないっ！

紗由里の一番感じてしまうポイントだった。まだセックスを始めて間もないというのに、猿顔のチビはそのねちっこい腰使いで、こちらのウィークポイントを探り当てていた。

「っ……くっ……はああっ！ ああんっ！ ああああああっ！」

もう我慢の限界だ。顎を仰げ反らし、あられもない不貞の艶声を発してしまう。今まで喘ぎ声を漏らしても、それは不可抗力のようなモノだった。意識して艶を押さえていた。

——ごめんなさいアナタっ！ あああっ、ごめんなさい！ 私っわたしいっ！

しかしもう言い訳できない。それは誰が聞いても心の底から感じている牝の絶叫だった。夫よりも遥かに巧みな陵辱者のセックスに、人妻の熟れた女体が敏感に反応し続ける。わななく唇から甘い嬌声がとめどなく溢れ出た。

「おらっ、ここがいいのか？ おらっ、おらあっ！」

猿顔は次々と紗由里の弱点を発見してはそこを執拗に肉先で擦っていく。もう耐えられない。人妻は黒髪ショートヘアを振り乱し、夫を裏切る背徳の官能に骨の髄まで蝕まれていく。股間から迸る快感の閃光で、目の前が何度も真っ白に染め上がった。

「いやあっ！ そんなところまでえっっ、あああっ！ わたしっ、わたしいっっ！」

愉悅の涙が溢れだし頬に流れると、その熱で渴いていた顔射ザーメンが溶けだした。再

び濃密な牡臭が鼻孔に流れ込んでくる。悪臭でしかないその匂いが、火のついた牝の部分
を更に激しく燃え上がらせる。

——こ、こんなの、こんなの初めてええっ！

形のいい腹筋がビクビクと肉悦に痙攣し、殴られた痣が淫猥によじれた。大きく開かれ
ている両足は、指先をギュッと丸めたままガクガクと宙を漕いでいる。理性だけではも
うどうにもできない。女性の全てがセックスの快感で沸騰していた。

「ああつ、た、たまんねえぜ。おいっ、先におっぱいでさせてくれ」

身悶える乳房をしゃぶり続けていたスキンヘッドが興奮に上擦った声を上げた。許しを
請うのは当然紗由里ではなく、同じ胸をしゃぶっているデブにである。

「しようがねえな。好きにしな」

そう言ってピアスを付けた分厚い唇が白いバストから離れた直後だった。興奮しきった
スキンヘッドは返事をする余裕もなく、凄まじいスピードで紗由里の腹を跨いだ。すでに
先走りの汁を滴らせている剛直を胸の谷間に置く。そして髪を振り乱していたシャドウハ
ンターの顎を掴んだ。欲情に血走った目が人妻を真上から見下ろす。そして——。

「挟め」

スキンヘッドは一言だけ口にした。何をとも、何で、とも言わない。しかし求められて
いる行為がなんなのかははつきりしていた。

——こ、これ以上……まだ私を辱めるつもりなのっ……。

紗由里は躊躇した。しかし、掴まれた顎にギュッと掛けられた力みがシャドウハンターの抵抗心を粉碎する。この少年に殴られた腹の痣は今でも鈍く疼いていた。マウントポジションのこの姿勢で、彼がキレればその拳は自分の顔に振るわれることだろう。

紗由里は両手で胸を脇からすくうと谷間に向けて寄せあわせた。
ずにゅんっ。

無数のキスマークが刻まれたバストで、陵辱者の肉棒を包み込む。

「ああっ。気持ちいいぜ奥さん。旦那のチンポをイカせるみたいパイズリしな」

スキンヘッドはそう命令しながらも、両手をマットレスにつき自ら腰を振りはじめた。両手でギュッと寄せあわせているバストの中を、剛直した男根がズリズリと擦っていく。紗由里の下乳と、スキンヘッドの開いた太腿の内側がぶつかる音がパンパンと漏れだす。

——ああっ、胸まで……こいつらとセックスしてみたい……。

その間も猿顔に女性器を犯され続け、喘ぎ声が止まらない。

「人妻のクセにつ。……人妻のくせにいいっ！」

猿顔の動きが紗由里の弱点を責めるねちっこい腰使いから、性急なものへとかわりはじめた。人妻のクセに、という口癖を上擦り声で繰り返しながらドンドンと腰の動きが加速していく。

ガシユガシユパンパンパンパンパン！

感じるポイントを的確に責める老獪な腰使いから一変した。若い欲情を叩きつけるような激しさに紗由里は顎を仰げ反らせる。パイズリ奉仕をする手の動きも止まり、股間から迸ってくる快感に耐えるためギュツと己の胸を握り締めるだけとなる。しかしそれが、中の男根をきつく挟み込みながら、猿顔の突入によつて身体が揺れてペニスを激しく扱く絶妙の行為となつた。

「な、中に出すからな！ 人妻マ○コのなかに、俺の生ザーメンぶちまけてやるからな！」
「だ、だめえええっ！ せ、せめて外にい、そとにだしてええっつッ！」

膣中を剥き出しの牡肉でゴリゴリと擦られる快感が壮絶すぎて、哀願の声すら官能的に震えてしまう。夫以外の相手に犯され、イッてしまひそうになっている。紗由里は愉悅の涙を流しながら黒髪のショートヘアを振り乱した。

—— いやっ！ ほんとうにイヤヤッ！ それだけはぜつたいにいややああつ！

しかし少年たちに廻り抜かれた女体は、ゴムを付けない数年ぶりの生セックスに溺れきつていた。膣襞たちは独立した生き物のように、直に密着している中のペニスを捏ね上げている。心の底から外出しを哀願しているにもかかわらず、紗由里の蜜壺は中での射精をせがむように淫猥に蠢いていた。

「今更、何いってやがるんだ。お前はもう俺たちの女なんだよ。旦那みたいな薄いのじゃ

ねえぜ。特別濃厚なやつをたつぷりと中にくれてやる。なあおい」

人妻の哀願を否定したのは、仲間たちに犯される紗由里を見ながら自慰をしているデブだった。猿顔はもう射精直前のガムシヤラな突入をしていて耳には入っていないようだ。

「ああっ、イクっ！ 人妻でイクっつ！ ああっ、人妻っ！ ひとつままああっつ！」

猿顔のチビは絶叫すると、限界まで腰を突き入れて動きを止めた。

ドグリユッ！ ドブどりゆどぐどぶどりゆどぐどぶぶつ！

夫にしか許してはいけない人妻の最深部に、他人の熱い生殖液が注がれる。もの凄い勢いであり量だった。ビチャビチャと子宮壁を直撃され、脳裏に官能の火花がバチバチと飛び散る。

「いやああっ！ いやっ！ こんななのっこんなのいやあああっ！」

盛大な中出しを決められて、紗由里の女体も一瞬で肉悦の沸点を突破した。切れ長の瞳を大きく見開き、ふくらはぎが吊りそうなほど両足の指を丸め込む。全身が性の快感で痙攣し、両手で掴んでいる己の胸を強く握り締めていた。乳房の中の男根が、女体の痙攣によつてパイズリしたままバイブレーションされる。

「なにがイヤだ、この淫乱がっ！ 中出しされてイキまくりやがって！ おらあっ！ おれもザーメンくれてやるぜっ！」

あられもないアクメ顔を晒す人妻を見下ろしながら、スキンヘッドも仰け反った。

ビブビュッ！　びゅくくつ！　どびゅどりゅどぶつ！

乳の間から凄まじい勢いで白濁の粘液が弾きでると、シャドウハンターの細い顎裏にビチャッと直撃して飛散した。そのまま顎から喉にかけて熱い肉汁を撒き散らす。子宮で、胸で、少年たちの欲情をぶちまけられ、その肉汁の熱さに、紗由里の絶頂感も長く続く。ビクッビクッとまるでしゃっくりのような突発的な痙攣を繰り返す。

「ふうっ。気持ちよかつたぜ奥さん」

スキンヘッドは完全に射精を終えると、胸の谷間からペニスを引き抜いた。そして肉先に溜まるザーメンの残滓をキスマークだらけの下乳で拭ってから降りる。

視界にいまだ身体を繋げたままの猿顔の少年が現れた。官能的にヒクヒクと全身を痙攣させている紗由里を粘ついた視線でジッと見下ろしている。

「人妻のクセに、中出しされてこんなにイキまくりやがってよお。お前、マジで俺に気があるんだろ」

悔しさに耐えきれず、逃げるように顔を横に向けた。そして横目で膣内射精をした陵辱者を睨み上げる。その瞳は愉悦の涙と悔し涙が混じりあつて潤んでいた。

「まだそんなツラをするだけの根性があるとはな。へへへっ。こりゃあ楽しみだ。あとでたっぷりその目も、このマ○コみたいにとろとろにしてやるぜ」

猿顔の少年がずるんっ、と男根を引き抜く際、あんっど甘い吐息が漏れてしまった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>